

最近話題となっている病害虫

岩手県農業研究センター環境部病理昆虫研究室 小山田早希

ハウレンソウ白斑病

学名：*Stemphylium botryosum*

英名：leaf spot

ハウレンソウ白斑病は、1997 年に米国・カリフォルニア州で、国内では 2000 年に群馬県において発生が確認された（酒井ら，2002）。岩手県では、2007 年に県北部の雨よけ栽培ハウレンソウで初確認され、多発事例も散見された（岩館，2015）。国内での発生は、現在のところ、北海道（三澤ら，2014）、青森県（青森県，2009）、岩手県、群馬県に限られている。病原菌は *Stemphylium botryosum*（KOIKE *et al.*, 2001；酒井ら，2002）および *S. vesicarium* の報告がある（三澤ら，2014）。

生態・被害：本病は 5 ～ 11 月頃に発生し、初期症状として、葉身に数 mm 程度の円形で暗緑色から灰色の小斑点が形成される。その後、病斑は淡褐色に変色するとともに癒合し、その表面は乾き破れやすくなる（図 1）。病勢が進展した病斑上には *Stemphylium* 属菌特有の俵型分生子（図 2）が多数形成されるため、顕微鏡下で比較的容易に診断できるが、初期の病斑は、高温時に発生する日焼け症状や、薬害との判別が困難であるため、注意が必要である。本病は種子伝染するとされる（KOIKE *et al.*, 2001）。

防除：現在のところ、ハウレンソウの主要な品種の中には、本病抵抗性の強いものはないと考えられる（KOIKE *et al.*, 2001；岩館，2015）。本病の防除にはホセチル水和剤、バチルスズブチリス水和剤、銅水和剤が有効であり、前年または前作で本病が多発したほ場では、これらの薬剤を播種 7 日後頃（発芽頃）から 7 日間隔で 3 回程度散布することで被害を軽減できる（岩館，2015）。なお、高温時の銅水和剤の散布は、銅剤特有の葉焼け症状の発生や、収穫間際の散布は葉の汚れにつながるため、使用は初期の防除に限られる。また、ホセチル水和剤は、農薬登録上ハウレンソウでの使用回数が 2 回以内（平成 27 年 9 月 18 日現在）となっているので注意が必要である。耕種的対策として、次作の伝染源を残さないようにするため、ハウレンソウ収穫後には残さをほ場外へ除去するなどして適切に処分することも有効である。

参考文献

- 青森県（2009）平成 21 年度有害動植物発生予察事業年報 149.
- 岩館康哉（2015）岩手県におけるハウレンソウ白斑病の発生とその防除法．植物防疫 69: 119-122.
- Koike, S. T., Henderson, D. M., and Butler, E. E（2001）Leaf Spot Disease of Spinach in California Caused by *Stemphylium botryosum*. Plant Dis. 85: 126-130.
- MISAWA, T. and S. YASUOKA（2011）The life cycle of *Stemphylium vesicarium*, the causal agent of Welsh onion leaf blight. J. Gen. Plant Pathol. 78: 18-29.
- 三澤知央・黒瀬大介・對馬誠也（2014）*Stemphylium vesicarium* によるハウレンソウ白斑病の発生（病原追加）．日植病報 81: 89（講要）.
- 酒井宏・原澤幸二・漆原寿彦・白石俊昌（2002）*Stemphylium botryosum* によるハウレンソウ白斑病（新称）．日植病報 68: 65（講要）.



図 1 ハウレンソウ白斑病の典型的な病徴



図 2 ハウレンソウ白斑病菌の分生子